

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370854

研究課題名(和文) 社会政策国家の政治文化史 ニューディール期前夜のアメリカ合衆国

研究課題名(英文) A Cultural History of the Welfare State: Before the New Deal Order

研究代表者

松原 宏之 (MATSUBARA, Hiroyuki)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：00334615

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：アメリカ合衆国における1930年代以降のニューディール期は、専門化、科学化、国家機構の拡充を基調とするアメリカ型社会政策国家の確立期とされてきた。しかしニューディール期前夜と言うべき1920年代はじめまでに注目するならば、そこではそもそもあるべき「社会」の構想が問われ、その担い手や方法をめぐって折衝がつづいた。本研究はとくに、第一次世界大戦期に総力戦体制を担った全米国防会議関連史料と、社会政策実践の一翼を担ったセツルメント・ソーシャルワーク運動関連史料とをあつかい、ニューディール期再考の起点を提示した。20世紀初頭に遍在した包括的な社会政策国家への願望は、この交渉の過程で縮退していった。

研究成果の概要(英文)：Historians have found the rise of the state institution from the late 19th century to the early century, leading up to the formation of the New Deal Order in the 1930s. Yet this study suggests it was not quite easy and smooth to consolidate a welfare state system. Close analyses of the Council of National Defense (1916-1919) and visiting nurses of the Henry Street Settlement show that diverse women had their own visions, issues, and actual achievements, challenging state institution and its technocrats and professionals over the authority. Given a lot of social and urban issues at the turn of the 20th century, while hoping for a functional state institution, a broad range of people did not necessarily reached a consensus regarding the shape of a welfare state.

研究分野：歴史学 アメリカ合衆国

キーワード：福祉国家 社会政策国家 アメリカ合衆国 全米国防会議 セツルメント 政治文化史

### 1. 研究開始当初の背景

福祉国家・社会政策国家への関心は高まっていたが、その国家・国家機構像は刷新を待っていた。また、アメリカ合衆国の事例を比較史の観点で検討する試みもすでに始まっていた。

ここにおいて、アメリカ合衆国におけるニューディール体制を、ヨーロッパ史で先行した「福祉の混合体論」に学びながら、「長い19世紀」の歴史性に即して再検討すべきと考えていた。とくに研究史上の谷間になっている第一次世界大戦末期を起点にして、1920年代を射程に入れ直すのが有効であろうと見て研究を開始した。

### 2. 研究の目的

アメリカ合衆国における1930年代以降のニューディール期は、専門化、科学化、国家機構の拡充を基調とするアメリカ型社会政策国家の確立期とされてきた。

しかし、「長い19世紀」の文脈において国家機構の内外で問われたのはそもそも「社会」とはなにかであり、ソーシャルワーク諸運動をはじめとするより広範な社会改良運動の潮流は無視できない。「福祉の混合体」論に照らしても、しばしば民間の中間団体をはじめとする多様な担い手とその過程に加わっていた。ニューディール体制を、こうした諸運動の交渉の産物として検討し直すのが本研究の目的である。

本研究はとくに、1910年代から第一次世界大戦末を経て1920年代はじめにいたるニューディール期前史に照準していく。それは、ニューディール体制の政治史に政治文化史を導入して、社会の動態を立体化していく作業である。

### 3. 研究の方法

中心をなしたのは、二種類の文書館一次史料群の調査である。

第一は、メリーランドの米国国立文書館(NARAH)を中心に収集した全米国防会議 National Council of Defense 関連史料である。とくに、女性委員会 Women's Committee と通称された傘下組織の史料について調査を進めた。

ワシントンでの全米国防会議本部での議事録や、刊行物と、州の側からの報告、訪問者などを対照することで、同会議の実際の動きを再現することができる。今回の調査期間では手が及ばなかったが、州以下のレベルでの史料にも見るべきものが多いことがうかがえるのも収穫であった。

第二に、コロンビア大学稀覯書文書館、コロンビア大学医科学図書館、ニューヨーク公立図書館で収集したソーシャルワーク運動関連史料である。とくに Lillian Wald と Henry Street Settlement 関連史料については、全貌を

見渡せるところまで調査が進展した。

コロンビア大学医科学図書館所蔵のニューヨーク訪問看護婦史料にみる訪問看護婦による訪問記録からたどり直すことが重要であった。訪問看護、ソーシャルワークから、教育面、社会的・政治的な側面におよぶリアン・ウォルドらの発言に裏付けを与えた実践が何であったのかわかる。分散している史料群を統合的に検討することで、社会政策国家の立ち上げに関わる民間団体の動向を跡づけていく作業に道筋がついた。

### 4. 研究成果

多くの社会問題をかかえた20世紀転換期のアメリカにあって、社会政策を担いうる機構への期待はたしかに高かったと言える。第一次世界大戦への参戦が、総力戦を支える機構の整備を要請したことも先行研究が指摘するとおりであろう。

しかしながら、こうした要請に具体的に応じる場面を見ると、事態を社会政策国家・福祉国家の誕生への一本道ということは難しい。

明らかになったのは、社会福祉や動員の現場にいた者たちからのさまざまな要求であり、社会改革の希求であった。20世紀当初には遍在した包括的な社会政策国家への願望は、この交渉過程のなかで縮退を余儀なくされ、のちのニューディール体制に制約を課していったように思われる。

具体的には、大きく次のふたつの事例を提示することができる。

(1) 先行研究において、全米国防会議は総力戦体制を支えて国家機構の整備を進めたとされる。この傘下において、女性委員会はその一翼を担ったものとしてごく簡単に位置づけられ、研究も必ずしも多くない。

しかしながら、ジェンダー史と政治文化史の観点を加えて史料を読み直すなら、ことははるかに複雑だった。

アメリカの第一次大戦参戦に先立つ1916年設立のこの半官半民組織は、軍需品調達、食料を含む民間資材の調達、輸送や労働力の配置、そして国内社会の士気の維持を任務とした。総力戦体制の構築を担った組織であったと言える。

ところが、この組織が具体的に稼働させることは小さな国家機構しか持たなかった当時の連邦政府には困難であった。半官半民のこの組織は、民間の協力を得たという以上に多くの実務を民間組織に依存し、それとともに民間からのさまざまな注文や異論との折衝を余儀なくされた。

なかでも同会議の実務を請け負った女性委員会 Woman's Committee に即して見ていくと、全米国防会議は激しい折衝の場であったと言える。収集史料の検討から浮かび上がるのは、この全米国防会議を支えた広範な民間

団体の役割であり、ただちに連邦政府の意向に服従したわけでない数々の思惑である。史料からうかがえるのは、諸州の多彩な組織との調整に苦心する女性委員会本部であり、そのあつれきから垣間見える戦時の短期的要求にとどまらないより長期の社会的要請であった。

もう一点重要なのは、この折衝が 1919 年時点ではついに合意をみなかったことである。この未決着が、その後のニューディール体制の準備にいかなる影響を与えていくのかは今後の大きな課題である。この点について、2017 年 6 月に Lisa McGirr 博士（ハーバード大学）を招いたワークショップで検討を加え、意見交換を始めた。引きつづき、取り組むための準備を進めている。

(2) 第二の事例たる 20 世紀転換期のニューヨーク市に設立されたヘンリーストリート・セツルメントは、移民、労働者家族を対象に訪問看護サービスを提供した。形成途上で行き届かないアメリカ型社会政策国家を補完する側面を持っていたことはたしかである。

ただし、訪問看護婦の経験に即していくならかれらがそうした体制補完にはとどまらなかったことが見えてくる。看護婦として、女性として周縁化され、階層差に直面した一方で、男性医師や行政よりも有効な医療者としての自負を深め、その中から社会改良の構想を抱き始めもした。

ヘンリーストリート・セツルメントの創設者リリアン・ウォルドとその周囲にあつまつた女性たちが、「訪問看護」の営みのもつ政治的、社会的な意味についてしばしば踏み込んだ発言をしていたことを、先行研究は十分に取り上げそこねてきた。

第一次世界大戦へのアメリカの参戦を契機に、反戦を唱えてきたウォルドはいったんは看護事業を介して全米国防会議の活動にも加わっていく。しかしこの時期にあってもウォルドらは、その活動を国家と一致させることはできないと論じ、東欧系移民や労働者層を多く抱える地域コミュニティとの関わりで発言を続けていく。日常の訪問看護業務の経験に支えられて、狭義の看護にとどまらない彼女たちの発言はこの社会的、政治的文脈で読み解くべきと思われる。

「アメリカ型社会政策国家」のありようはこうした挑戦とともに検討されなければならない。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

Matsubara, Hiroyuki. “‘The Cultural Turn’ and the American History in the 21st Century.”

*Nanzan Review of American Studies* 38 (2016): 77-84. 招待論文(査読なし)

松原宏之「医療、福祉、社会運動の境域—20 世紀初頭ニューヨークの訪問看護婦たち」『史苑』76, no. 2 (2016): 101-13. 招待論文(査読なし)

松原宏之「『市民』と兵士のセクシュアリティ—アメリカの『長い一九世紀』を事例に」『新しい歴史学のために』no. 288 (2016): 20-33. 招待論文(査読なし)

[学会発表](計 4 件)

Matsubara, Hiroyuki. “The Council of National Defense and the Woman’s Committee: The State and American Women during World War I.” Workshop at the Institute for American Studies, Rikkyo University, June 6, 2017.

松原宏之「訪問看護婦のラディカリズム—20 世紀初頭アメリカの医療、福祉、社会運動」生物学史研究会(日本科学史学会生物学史分科会)東京大学駒場キャンパス、2016 年 02 月 20 日)

松原宏之「訪問看護婦と社会運動—『長い 19 世紀』の終わりと女性専門職」アメリカ医療史研究会シンポジウム(青山学院大学、2015 年 10 月 17 日)

松原宏之「医療、福祉、社会運動の境域—20 世紀初頭ニューヨークの訪問看護婦たち」立教大学史学会大会(立教大学、2015 年 06 月 20 日)

[図書](計 2 件)

松原宏之「ヘンリー通りセツルメントと医療、社会、政治—二〇世紀転換期ニューヨーク市における『訪問看護』の現場から」平体由美・小野直子編『医療化するアメリカ—身体管理の 20 世紀』彩流社、2017 年、259 頁(51-90)

松原宏之「カルチュラル・ターン後の歴史学と叙述」歴史学研究会編『新自由主義時代の歴史学(第四次 現代歴史学の成果と課題 1)』績文堂出版、2017 年、303 頁(191-205)。

[産業財産権]

○出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：

種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
<http://319.air-nifty.com/>

## 6. 研究組織

(1)研究代表者  
松原 宏之 (MATSUBARA, Hiroyuki)  
立教大学・文学部・教授  
研究者番号：00334615

(2)研究分担者  
( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：

(4)研究協力者  
( )